

# ジョセフ・プリーストリーの経済思想 ——経済学と富裕への道

松本哲人\*

## I. 問題の所在

本報告では、プリーストリーの経済思想を以下の二点に焦点を絞り論じる。

まず、プリーストリーにおける経済学の位置付けについて。プリーストリーは非常に多岐にわたる業績を残している。その中で彼の経済学がどのような位置を占めるのかについてこれまで考察されたことはなかった。彼は経済学に関して、「富裕と力」を生み出すための学問として非常に高い評価を下していた(第II節)。

次に、「富裕と力」を生み出す方法について。これまでプリーストリーの経済思想に関しては、スミスからの影響力を重視する議論が非常に多い。だが、過度にスミスに引き寄せた結果、プリーストリーは最小国家論者として議論されることが多い。実際にはそうではなく、プリーストリーも国家が為すべきことと為さざるべきことを分類し論じている(第III節)。

## II. プリーストリーにおける経済学の位置付け

プリーストリーは「科学 science」を自然世界を研究する自然哲学 natural philosophy と人間社会を研究する道徳哲学 moral philosophy に明確に分離している。また、統治学である政治的知識 political knowledge は道徳哲学に基礎があると論じる。「政治的知識は、政治家や国家の代理人たちにとってのみ有用であると言われている。」人間社会の「安全と幸福」を達成するためには政治的知識が必要なのである。

その政治的知識の中でも、プリーストリーは特に法学と経済学が重要である

---

\* 龍谷大学経済学部・関西大学経済学部非常勤講師。 priestley.joseph@hotmail.com

と考えていた。法学に関しては特に法の進展が重要であるとみなしていた。「法の進歩に関する理論は、社会の改良に比例して、人々の考えがどのように拡大し、洗練されたかを示しているので、哲学者や形而上学者にとって素晴らしい思索の対象である。」他方、プリーストリーは経済を対象とした学問である経済学を社会の進展や改良を考える際の重要な対象とみなしている。「社会の進歩および国民が富裕 *opulence* と力 *power* に進んでいく段階は、思索 *speculation* のうちもっとも魅力的かつ有用な対象の一つである。」法学が「哲学者や形而上学者にとって」という限定が付されている一方、経済学に関してはそのような限定が付されていない。「哲学者や形而上学者」以外の人々にとっても経済学が扱う対象はより密接に人々の生活に関係していたからである。実際、プリーストリーはそのような思索が「日常の営為」においても有用であると論じている。

プリーストリーは、経済学を自然科学的実験および観察とは異なる道德哲学として位置づけていた。プリーストリーは自然哲学や道德哲学における思索には「経験 *experience*」からの推論が必要であると論じている。「経験がなければ、思索は真の哲学を破滅させるものと前々からなっている。」自然哲学における「経験」は、実験および観察から、他方、道德哲学における「経験」は、歴史から引き出されうるとプリーストリーは考えていた。「歴史は…先を予見する経験 *anticipated experience* と呼ばれるだろう」とプリーストリーは論じる。歴史は過去の出来事の因果関係を考察することがその主な目的である。その歴史を学ぶことで人々の知性や判断力が向上し、生活の中で歴史上起こったことと同じような状況になったとき、よりよい判断を下すことが可能となるのである。実生活における経験は「非常にゆっくり」としか積むことができないので、歴史を学ぶことにより実際よりも多くの疑似体験を積むことが可能になる。それゆえに、道德科学において歴史は、自然科学における実験および観察と同じ地位を与えられることになり、プリーストリーは、自然科学の方法とは異なる方法を道德科学やそのなかに包摂される経済学では用いると論じているのである。

また、プリーストリーは「科学 *science*」と「技芸 *art*」を「理論 *theory*」と「実践 *practice*」に分類し、「近代における技芸の大きな改良は確かに科学に後発した改良から生じている」と論じている。そして、「有用な技芸ともっとも直接的な関係を持っている科学は、自然哲学 *natural philosophy* および化学

chemistry」であると考えていた。1780年代以後に急速に展開したと考えられる産業革命は、科学における進展の結果であるとプリーストリーは見なしているのである。プリーストリーのこのような科学観は、それまでの技術から推論される科学体系の構築という視点とは完全に一線を画す。「科学に基づいた技術 (Science-based technology)」は 19 世紀以降に展開されたと通常は考えられているが、プリーストリーは 18 世紀後半の段階でそのような立場を既に取りついていた。それゆえに彼は産業革命期の科学や思想を先導する存在となりえたのであった。しかしながら、プリーストリーは科学を他の 18 世紀までの著名な自然哲学者たちと同様、「神の摂理 Divine Providence」の解明手段と見なした。その点において彼の科学観は、旧来の枠組みに留まっており、富裕や力の獲得を目的とした経済学も神の摂理に適っていると考えていたのであった。

### III. 富裕への道

プリーストリーは国家を豊かにするためには経済学が必要であると考えていた。その豊かさの指標は、「資本 stock の増加、土地の耕作、製造業の価値 value、商業の拡大によって判断される」のである。前者 3 項目は主に生産、後者は交換の問題（「商業はある物と他の物の交換に本質がある」）に分割することができる。プリーストリーにとって経済学はスミスと同様、生産と交換の問題なのであった。プリーストリーの眼前には、すでに商業社会が広がっていたのであった。

生産のために投下される労働こそが「富の唯一の本源的な起源である」とプリーストリーは論じている。そして労働により、地球から食糧や原料などの様々な物質を獲得することができ、製造業にもさまざまな良い影響が引き起こされるのである。「これ〔労働〕によって人々は、地球や海から自分たちの食糧、衣服および住居の原料およびその他の快適な生活を手に入れることができるようになる。〔また、〕これ〔労働〕によって、彼らは、道具やエンジンを作り、労働を短縮させ、分割する。そして、少ない人数で多くの人々のための十分な生活資料 provision を作り出すことができるようになるのである。」

プリーストリーはここで農業が製造業に先行すると考えていた。プリースト

リーにおいて農業とは、食糧生産だけでなく、製造業の原料の採掘なども含む広範な地球に対する人間の働きかけを意味していた。プリーストリーは論じる。「広い意味で農業に注意が払われなかったならば、これらの製造業や〔生活における〕便利さは存在しない。」なぜなら、「すべての動物生活は完全に地球から維持されている〔しまった、〕…地球から私たちは人間生活を改良し、美しくする製造業や技芸のすべての原料を引き出している」からである。それゆえ、プリーストリーは生産に関わる農業従事者（現代風にいえば広い意味での第一次産業従事者）や製造業者を「労働者 labourers」と呼び、「彼らの労働だけが国家の富に付け加えているのでまさに生産的である」と論じている。

プリーストリーはスミスと同様、生産力は分業によって増大すると考えた。「技芸の改良された状態の大きな利点は分業から生じる」とプリーストリーは論じている。先に論じたように、プリーストリーは「技芸 art」を「実践 practice」、「科学 science」を「理論 theory」と分割していた。プリーストリーにおける分業は、工場内分業のそれに留まるものではなく、「科学」を用いた広範な「技芸」に対して当てはまるものである。例えば、「数学的知識は労働を節約するエンジンの製造に非常に有益である」とプリーストリーが論じたとき、「数学的知識」が科学に、「労働を節約するエンジンの製造」が「技芸」に該当する。「数学的知識」を持っている人物は、「それ〔分業〕によって彼の注意を1つに限定し、より大きな完成やすさまじい迅速さでそれ〔そのエンジンの製造〕を行う」ことが可能となる。当然、「数学的知識」は「労働を節約するエンジンの製造」以外にもさまざまなことに適用することができるので、「数学的知識」の進展は、より大きな分業を引き起こすことを可能とするのである。「科学」の進展が、分業を通して「技芸」を改良し、生産力をより増幅させることができるとプリーストリーは考えていたのである。

人々は、生産力の上昇によって、「自分たちの状況を改善し、自分たちの便宜を増やそう」とする。それゆえに、人々は生産物を交換するようになるのである。「もし現在、特に必要と感ずるものが、母国で見つからなければ、海外でそれを人々は探すであろう」とプリーストリーは論じ、国内商業が優先し、次に国外商業がもたらされると考えていた。また、このような生活改善欲は「人間本性」によって導かれているとし、その欲が商業を引き起こすとも考えていた

のである。

商業によって人は「富と寛大な精神 *spirit of princes*」を手に入れることができるとプリーストリーは考えていた。前者の「富」は、「商業の主要、適切かつ直接的な利点」である。交換のためには自分たちが消費する以上の生産の余分または生産したものの儉約が必要となる。そのために人々は、「勤勉を刺激し、労働を増加させる」のであり、そうすることで「人間生活はより幸福になる」とプリーストリーは考えたのであった。また、商業を行うことで、人々の「平和に対する愛着」がより大きくなるとプリーストリーは考えた。なぜなら商業がスムーズに行われるためには「自由で平静な通商 *intercourse*」が必要であり、多くの人々との「より密接で大規模な…関係をもたらす」ので、「慈愛心によってより好ましい影響を持っている」からである。

生産と分業を行う前提としてプリーストリーは、私有財産権の確立と個々人の自由な活動の容認を国家に要請している。「私たちが国家と呼んでいる広範な社会を形成するように人々を導く原理は、所有の平静な享受を確保したいという願望である。」プリーストリーは国家の役割を最小化する必要性がある、言い換えれば、生産や取引などの経済活動に政府が積極的な役割を担うことは不必要であると考えていたのである。

プリーストリーは、国家の役割として、所有権の確立や自由な経済活動を支える制度作りのほかに、公共財の建設および公教育の提供を認めている。公共財の建設は、交換をより円滑に行うために必要であり、公教育は分業による各人の能力低下を食い止めるための手段であった。まず、プリーストリーは、「公共の道路や橋」を国家が税金を使って建設するのではなく、それが求められている地域に対して、「国家の力がそれを建設するようにその地域住民に強制する、もしくはその建設方法を指揮することが必要であるだろう」と論じる。つまり、国家が自ら特定地域の利益を誘導するのではなく、地域住民たち主導の下で公共財の提供はなされるのが「もっとも都合がよい」とプリーストリーは考えた。その公共財を建設するための財源は、「その道路もしくは橋の使用に対する通行料によって」賄われるのが「もっとも理にかなっている」とプリーストリーは論じている。「なぜなら、あらゆる人物は彼が受けた便益に応じて支払っているからである。」プリーストリーは公共財の提供に関しては、特定地域に特

に利益をもたらすので応益負担原則を中心に考えていたのである。他方、プリーストリーはスミスと同様、分業の弊害を取り除くためには政府による「公教育 public instruction」が必要であると考えた。分業によって社会が改良されれば、「各々の人物の職は非常に限定されるので、それにおける完成に達するため、あらゆる別の物を各人はある程度犠牲にしなければならない。結果的に、人々は文筆 letters に関する知識や読書によって自分を改良する機会がなければ機械同然となってしまうだろう」とプリーストリーは指摘している。この問題は「社会全体が興味をもつ対象」であるので、その財源は、税金によって賄われる。プリーストリーは、基本的には、内国消費税による税徴収がもっともよいと考えていた。

#### IV. 結語

プリーストリーは、経済学を科学と位置付け、富裕をどのようにすれば達成することができるのかを明らかにした。プリーストリーの経済思想は、一少なくとも彼自身がそのように考えていたようにスミスやステュアートが打ちたてた経済学を積極的に摂取しながらも、宗教的側面を色濃く残している。神の摂理が世界を完全性へともたらすという彼の基本的な考えは、経済学に対しても適用されるのである。

プリーストリーは、自身が論じているように、スミスから多くを学んでいるけれども、モンテスキューからの影響力も非常に強く、モンテスキューの商業に関する考察から示唆を受けていると思わしき部分も存在している。プリーストリーはモンテスキューを非常に高く評価していたし、プリーストリーの経済思想ないし政治的知識に関する部分全体に大きな影響を与えているように思われる。これらの点が今後の課題として残される。

【当日、脚注および参考文献を含む完全原稿を配布致します。】